

韓国薬学研修報告 ～韓方市場を見学して～

水野 靖久

薬学部5年 09A133

・韓方市場の見学について

今回、見学に行ったのは韓国で最も大きな韓方市場として知られているソウル薬令市でした。まず、祭基洞(チェギドン)駅に着くと駅構内に生薬の特設スペースがありました(図1)。そこには、さまざまな生薬がプラスチックの容器に入れられ、ショーケースの中に展示されていました。また、韓方調剤に使う薬研、乳鉢、土瓶などの道具も展示してありました。駅構内からすでに韓方で有名な市場だという印象を持ちました。



図1. 駅に展示された生薬

そして、地下鉄から出ると道の両脇にビニールシートを広げている露店がいくつもあり、ビニールシートの上にそのまま生薬が置かれているものや、ビニール袋や段ボールに詰められている生薬などがありました。さらに韓方市場の門をくぐると建物の中だけでなく、屋外でも生薬を目にすることができ、屋根の先からつるしてある生薬もありました。このようにいたるところに生薬がありました(図2)。また、生薬を加工できる機械など置いてあるお店もあり、加工から販売まで行えることが分かりました。

今回、韓方市場の近くにあるソウル薬令市韓医薬博物館(図3)にも行く予定でしたが、残念なことに休館日であったため、入ることができませんでした。博物館では様々な生薬や調剤道具が展示してあるということを開



図2. 韓方市場



図3. 博物館の入り口(地下にある)

いたため、機会があれば見学したいと思います。

韓国では祭基洞(チェギドン)駅付近の韓方市場以外でもソウル市内を歩いているだけで、いたるところに生薬を売っている露店があり、韓国での生薬の一般の方への浸透率の高さがうかがうことができました。

・漢方と韓方

韓国では日本の漢方と異なり、韓方と呼ばれている医学があるということを知った。日本と同様に中国の漢方をベースとしていたが、韓国では独自の漢方を研究・開発してきたため、その伝統をふまえて、「韓方」という

呼び方に変わった。このように、中国の漢方よりもより韓国人の体質に合うように進化したものであるということを知りました。

また、韓国では日本の医療と異なり、医師と薬剤師がそれぞれ西洋系と韓方系の2つに分かれています。薬剤師は主に西洋薬と既製品の韓方薬を調剤することができますが、一方で韓薬剤師は個々の症状に合った生薬を細かく配合して調剤することができます。以前は薬剤師の資格を取れば韓方薬も調剤できる時期があったようですが、1997年に法律が変わったため、今では薬剤師、韓薬剤師がそれぞれ完全に分かれており、大学もそれぞれ異なる学部となっているとのことでした。

・感想

今回韓国の研修旅行に参加することで、日本ではあまり見かける機会が少ない韓方専門の病院や薬局が多く、韓方の利用者が多いことがわかりました。

そこで、日本の漢方薬と異なり、韓方薬は保険の適応があるのではないかと考え、韓方の保険適用について調べました。しかし、日本と同じで既製品のみ保険の適用となっており、それ以外の韓方処方箋は適用外となっていました。にもかかわらず、韓方の利用者が多いことから、韓方は韓国においてとても信頼が厚い医療なのだと感じました。

韓国の医療施設では施設ごとに薬歴が無く、コンピュータを介して、すべての病院・薬局での処方を一括管理しています。それにより、どこの医療施設に受診してもその患者が今まで処方されたすべての薬歴を見ることができ、重複投与が起らないように工夫されていました。日本においても高齢者による多くの医療機関の受診や生活保護を受けている患者の抗精神病薬などの重複投与が問題となっています。そのため、こういったシステムを導入することで、医薬品の過剰投与や相互作用などのリスクの軽減、および国の医療費の削減につながるのではないかと感じました。

韓国の薬局（図4）・病院では錠剤は素錠のままボトルに入れて保管されており、患者に薬を渡す際に一包化していました。患者ごとに一包化しているため、調剤に時間がかかるのではないかと考えましたが、韓国の薬局では効率よく薬を一包化するための道具（図5）や工夫がされていることを知ることができました。



図4. 薬局内



図5. 一包化を効率良くするための道具

今回韓国の漢陽（ハニャン）大学を見学した後、薬学部生同士の交流会に参加したが、自分の英語力が不足していたため、聞かれたことに簡単な英語で答えることで精一杯でした。しかし、自分たちの研究内容や薬についての知識について意見を交換できるように、これから英語をがんばって勉強して、次回韓国やその他の国への研修があった時には積極的に参加したいと思いました。